

ラグビー・ワールドカップの快挙

4年前、日本代表のラグビー・チームが、強豪で知られ、優勝経験もある南アフリカと予選で戦った。……それまで、次の2019年のワールドカップは日本で開催するのだが、南アフリカは、日本では野球やサッカーの人气があってラグビーの人气はないし、盛り上がらないだろう。第一、日本のラグビーは弱いから、南アフリカで開催するべきだ、と言ってきた。……試合は、南アフリカの3点リードで、最終局面になって、日本ボールでホーンが鳴った。つまり最後のプレーで、相手ボールになったり、ペナルティ（反則）になったら日本は負ける。ヘッドコーチは、ペナルティキックを指示したが、リーチ・マイケル主将はスクラムからのトライ狙い、一発逆転をメンバーに指示した。……実際に体のぶつかり合いから、勝てる!と考えた。ただし、ホーンがなっているから、ペナルティ（反則）は許されない、ただちに敗北である。それからの数分間は、ゴールに突進し、ラックからボールをだして、また突進する。これを繰り返し、ついにボックスにボールが渡り、逆転トライである。この報は、瞬く間に世界中を駆け巡り、「スポーツ史上最大の番狂わせ」と、これはむしろ南アフリカから発信されたのである。TVで観戦していたこちらは、「押せ、押せ!」と手に汗にぎりしめて応援していたのだが、ちょっと感激した。南アフリカは、初めは日本が相手だから、と少々舐めていたのであるが、それにしても、気づいたときにはもう後がない状態だった。

日本の40分のホーンが鳴ってからの攻撃は見るべきもので、パスからラック、またパス、スクラムハーフの田中のおちついたボールさばきから、ついにボックスへのパスでゴールに飛び込んだのだが、この頃には点を取るだろうとの予感があった。まさに快挙である。……この時、田中は「小さな巨人」と評された。

そして2019年、日本開催のワールドカップ。TVでの観戦だが、世界中の強豪の闘いをナマでみることができる。ただし、日本が予選を突破する率は低いだろうと考えられていた。5チームで戦い、うち2チームが決勝に進むことができる。当面の相手はアイルランドとスコットランドである。スコットランドは、その前年、日本でテストマッチをおこなったが、全敗である。アイルランドにいたっては、世界ランキング1位。大会中に2位になったが、当然日本は

勝ったことがない。その身体をみても、このフォワードを相手にするなら相撲取りをつれてこなければ、と思うくらい体格差があり、フォワードの合計体重でも 30 kg 相手が大きい。アイルランドのフォワードは、スコットランドのフォワードを圧倒し粉砕した。ところがその相手を押し切ったりをくりかえし、相撲取りのような体格のアイルランド選手が茫然として、戸惑っていて、なかばパニックに陥っていた。今、自分がどういう立場にいるのかを理解しがたい。このことは、スコットランドも同様で、体重差をひっくりかえして相手はなす術を知らない状態にもちこみ、後半にはエースをベンチに下げざるを得ない状況まで追い込んで、つまり諦めさせたのである。

この大会の白眉は、釜石で試合をしてくれたことである。かつて新日鉄釜石で日本選手権七連覇した栄光の歴史が消えて、2011 年の大地震・大津波で壊滅状態になった。ようやく復興の兆しが見えてきたときのラグビーの試合である。市民の喜びが目に見えるようである。元ラグーマンも多く亡くなっているだろう。

2011 年といえば、サッカーなでしこジャパンが、世界制覇したとき、板にお見舞いありがとう、と直接、礼の言葉を書いて、場内を 1 周した。これも初めてのことだろう。

南アフリカ共和国は白人の黒人差別がひどく、数十年かかってようやく黒人のマンデラ大統領が誕生し、なにか熱中できるものをということでラグビーをえらんだ。治安の悪さを改善しようとした。そのドキュメンタリー映画のなかで、ニュージーランドのオールブラックスに勝って優勝するのだが、オールブラックスの強さをマンデラ大統領に説明するシーンがあり、「日本相手に 145 点（この大会の記録として認定されている）をとって勝ちました」・・・マンデラ大統領が、「1 試合でか？」。

オールブラックスのヘッドコーチが、決勝まで日本と当たらないグループにはいったことは、運がよかった、とお世辞にしても、そこまで言わせたことは大変なことである。それほど日本の実力がみとめられたことであり、事実今年のチームでオールブラックスと試合をさせたかった。

かつて日本のラグビーは、弱かった。10 年以上前だったか、大学ラグビーが

人気があったとき、相手が（日本人である）突進してきたとき、早稲田かどこかのフォワードが尻っ放り腰でタックルに行ったようにみせかけただけで、結局は得点されてしまったことがある。その選手が日本代表か何かになって、こりゃダメだ、と思った。

これではダメだ、と 165 cm の田中史朗選手がニュージーランドにラグビー留学をしてレベルアップをしようとした。田中は、今回の大会でも控えながらここぞというときに出場し、活躍した。前回の南アフリカ戦では、自分の倍もありそうな選手に真っ向からタックルしはねとばされたけれども、あれが 1 番のプレーですと語った。それほど命懸けでたたかったのである。……さきの尻っ放り腰の選手には理解できないほど勇気ある仕事をし、臆病者とはわけが違う、というより魂が違う。日本は強くなったが、こういう選手が代表になっているのである。

それから 4 年。キッカーの田村がスコットランド戦で勝ったあとの記者会見で語った言葉で、試合後の興奮のまま、

誰も僕たちが勝つとは思わなかった

誰も接戦になるとは思わなかった

誰も僕たちが、どれほど多くのことを犠牲にしてきたとは思っていない(ア

イルランド戦は 10 月 13 日。この時点で 240 日の合宿を行ってきた。)

.....

信じていたのは僕たちだけだ！

4 戦全勝で、所期の目的である決勝トーナメントに出場することができた。多くの選手がインタビューをうけていたが、笑わない稲垣選手が、「代表に選ばれて 7 年間、初めてパスをうけてトライすることができた。嬉しかった。……そしてこの度の豪雨で被害を受けられた方々に、ラグビーで元気を出していただこうと……」と被災者に言及したのである。これには驚いた。サッカーのなでしこジャパンと発想が同じである。

この 3 人を筆頭にリーチ・マイケルのキャプテンシーがいたところでみられ、決勝トーナメントでは、南アフリカと最初にあたるという皮肉な場面もあ

ったが、20点差で負けた。これが、現在の日本の実力かもしれないし、世界との差なのだろう。南アフリカは、このあと勝ち続け、優勝した。

かつてはオールブラックスが日本に遠征するとき、「100点差以内なら、まあよく頑張ったとしよう」などと考えていた時代もある。実際、60～70点差がついたものだった。

アイルランド戦など、ホーンが鳴った時、アイルランドのボールで場所はアイルランドのゴール内だった。彼らは、自らボールを蹴り出して、ボーナスポイントの1点を獲得しにいった。負けを認めたのである。

決勝トーナメントでは、フランスやイングランドと戦いたかったし、オールブラックスとも戦いたかった。

田中の無謀ともいえる挑戦。田村の血を吐くような言葉。笑わない稲垣の意地。災害に遭遇した人々への心遣い。流の国家斉唱時の涙。……この大会の後、ラグビー選手のコマーシャルや、番組への出演が飛躍的に増えた。大きな身体 of 選手たちがラグビーの試合をしに来たと空港の税関を素通りする。最後に田中が同じように通ろうとしたら、「お前のようなラグビー選手がいるわけがない」と止められた話や、フォワードの選手が4～5人並んで歩いていたらチンピラがこそこそと道を譲った話、あるいは酔って道に寝ていたらトラックが上を通ったが怪我ひとつしなかった話など、今まで出てこなかった逸話が話題になる。

いろんなことがあったけれども、今後世界中で、日本のラグーマンは、あちこちでリスペクト（尊敬、敬意を示す、敬われる、など）されるだろう。これが今大会最大の収穫ではないだろうか。ひょっとしたら、ノー・サイド（No side；敵味方なし）やワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン（One for all, All for one；一選手が全員あるいはチームのために、全員が一人の選手のために）という、和製英語が通用する日が来るかもしれない。……まさか！

2019.10.31.

